

教師力向上支援事業派遣研修報告書

- 1 所属・職・氏名 小矢部市立大谷小学校・教諭・篠島 祐貴
- 2 研修期間 平成30年9月17日(月)～平成30年9月24日(月) 8日間
- 3 調査研究課題 コミュニケーション能力を育み、学びを深めていくための教育活動の在り方
- 4 研修機関等 シアトル：在シアトル日本国領事館
ビーコンヒルインターナショナル小学校
ジョンスタンフォードインターナショナル小学校
サンフランシスコ：メンロー大学、スタンフォード大学
バンクロフト高校

5 研修の概要

シアトルやサンフランシスコはIT企業の進出拡大が進み、国内外から多くの人材が集まる地域である。また、人種的、民族的、文化的、そして所得階層的に多様性のある社会である。グローバルな視点で、これからの教育を考えるに相応しい研修先である。視察を通して得られた知見、調査研究課題を踏まえた所感をまとめ、研修報告とする。

(1) 視察

① 教育機関の視察

第二言語力を高める教育活動

外国語を効果的に習得する技法としてイマージョンプログラム（母国語ではない第二言語で授業を行う方法）が取り入れられていた。ビーコンヒル小学校は、英語を母国語としない子供が多く、クラスの半数が英語クラスとなっており、一日の授業の大半は英語を用いて行っているとのことであった。ジョンスタンフォード小学校は、日英のバイリンガル教育が受けられる小学校であり、参観した授業は日本語を用いて行っていた。教室にも、日本語の掲示物が多く、日常的に日本語に触れる環境が整えられていた。

授業におけるICTの活用

ビーコンヒル小学校では、授業の前半は子供たち全員がスクリーンの前に集まり、教師がICTを用いて提示した資料を見ながら、課題について意見交換していた。その間、書くことは一切せず、聞く、話すことを重視していた。ジョンスタンフォード小学校の幼児クラスでは、プログラミング用の教材「Ozobot（オゾボット）」を用いて活動していた。Ozobotとは、線と色を識別して動く小型ロボットである。赤、黒、青、緑の4色をセンサーで認識し、色によって異なる動きをするため、子供たちは紙に色を変えながら線を描き、ロボットを自由に動かしていた。日常的にコンピュータを使い、問題解決の道具であるという認識をもって使わせるようにしているとのことであった。



指導助手の配置

2つの小学校のどのクラスにも指導助手が配置されていた。指導助手は教員免許がなくてもなることができる。指導助手は採点をしたり、つまずきのある子供、学習の中で困難を抱えている子供を支援したりする。算数の学習では、指導助手が5人の子供を少人数スペースに集め、個別指導している様子が見られた。様々な母国語の子供たちが混ざり合っているため、言語的なサポートが必要な子供に対し指導助手の果たす役割は大きい。一方、担任は授業を集中して行うことができ、放課後は専門性を高める時間、子供の支援について話し合う時間を生み出すことができる。



② グローバル社会と教育

在シアトル日本国領事館の山田氏、シリコンバレージャパンユニバーシティの発起人である榎本氏の講話から、グローバル人材に求められる力、その育成に必要な考え方について学んだ。

これからの教育に必要なこと

日本の教育はこれまで、規律正しいこと、基礎的・基本的な力を大切にしてきた。しかし、より付加価値の高いものが求められるようになってきている今、大きく変わる社会に適応し、世界に通用する人材の育成が必要である。時代が変わっても、時間を守る、約束を守るという規律正しさ、基礎・基本的な能力は欠かせない。しかし、「イノベーション」が求められることを考えると、これまで以上に主体性のある行動が求められる。これからはコミュニケーション力、リーダーシップのある人を育てることに重きを置かなければならない。

グローバル社会で活躍するために

これからの社会では、今までなかったものを新たに生み出していかなければならない。正しい答えがはっきりしていない中で、決断しなければならないこと、話し合いで答えを出してまとめていかなければならないことがある。それらを人種的、文化的に多様な人たちとコミュニケーションをとりながら行っていかなければならない。また、リーダーシップとは、集団の幹部になる、人を束ねるということではなく、いかなるときも好奇心をもって自主的に動き、行動力を発揮できるということである。シリコンバレーには「フェイルファスト」という言葉がある。行動すると失敗はある、失敗しても大丈夫、失敗しながら物事を創り上げていくという考えである。そのような考えが社会全体に広がっていることで、新しいものを生み出そうとする人同士でネットワークを築きあげることができる。

③ AIの時代

シアトルのアマゾン本社付近にある「Amazon GO」を利用した。これは惣菜、加工食品、飲み物等が陳列してあるコンビニのような店である。しかし、コンビニと大きく異なるのは、レジがないことである。買い物は、「①スマートフォンにダウンロードした専用アプリのバーコードを入口ゲートでスキャンして店内に入る。②欲しい品物を手に取る。③品物を持ったまま、バーコードをスキャンして店外に出る。（支払いは、事前登録済みのクレジットカード決済）」という手順で行う。店内の無数のカメラ、マイク、センサー等で商品や人（スマホ）の動きを捉えているとのことであった。現在、当たり前のように人が行っている仕事（作業）のほとんどがAI化する時代は、もうすぐそこまで来ていると感じた。



(2) 所感

研修前、コミュニケーション能力とは「他者と円滑に意思疎通を図る力」という定義どおりのものとしか捉えていなかった。グローバル社会では、多国籍、多文化、様々な価値観の他者と関わり、新たなものを生み出していかなければならず、物事への好奇心、行動力、自主性、多様な言語、知識や経験等、様々なものを統合して他者と関わるのが大切であると今回の研修を通して学んだ。コミュニケーション能力を育むために必要なことが多く存在し、それらを日頃の教育活動で養っていかなければならないのだと思った。

昨今、社会の変化に伴い、大きな教育改革がなされている。子供たちに求められるものが見直されているということは、その子供たちを教育する自分自身が、これまでの行いや考え方を見直し、人間力を高めていかなければならないということである。「子供たちが主体的に・・・」と言いながら教師の思いの範疇で子供たちを動かしてはいないだろうか。学級集団の中で一人一人の個性、思いを本当に大切にできているのだろうか。社会人として、国際情勢や社会の変化に目を向けていただろうか。子供たちの資質能力の向上につながる教育活動が展開できるように、今回の研修での学びをきっかけとして、教師力の向上に努めていきたい。